

かつて氷河だった部分が今はスキー場に。アンカレッジ近郊には外国のディベロッパーが開発したスキーリゾートが多くあります。



アンカレッジ周辺の建物は低層のものが多くの特徴です。

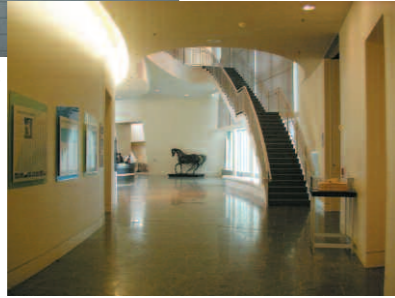


ターナゲン湾のほとりには、津波の跡を示す立ち枯れの木立があります。

駐車場近くまで現れたヘラジカの子供 (佐野弘蔵撮影)。



(上) (右) アラスカ大学のミュージアムはモダンな建築。展示は古くからの民俗・習慣がまとめられており、見応えがあります。



初めてフェアバンクスを訪問した時、太陽は山火事でボンヤリ見えました。



アラスカ大地震の津波で水没した地域。立ち枯れの木立は日本の大正池のよう。



(上) フェアバンクスの遊園地には、ゴールドラッシュ時代の砂金採集の装置が展示されています。(下) フェアバンクスのアラスカ大学分校には野生大型動物の保護センターが広がります。

## 自然の宝庫に起きたこと

カナダの北西に位置するアラスカは、かつてはロシアの領土。当時はカリブーやトナカイなどの毛皮を得ることが、この土地の主たる利用価値でした。1867年にはアメリカが、今考えると驚くほど安価な値段で手に入れ、49番目の州に。その後、ゴールドラッシュに沸いた時代もありましたが、やがて砂金の採掘量は減少。第二次世界大戦後には、冷戦に備えて北極圏に派遣された軍隊の駐留先にもなりました。アラスカが観光地として脚光を浴びるようになったのは、故郷に帰った兵士の話が広まったからでした。氷河と森林、そしてマッキンリー(デナリ)山という観光資源を有するアラスカは、アメリカ人のみならず世界中の旅行者の憧れの地になったのです。そして、そこに起こったのがアラスカ大地震でした。



## アラスカを見る

人・環境・建築への旅 建築家 榎沢成明

自然の中で大地震・地球温暖化を考える

## 歴史を思い出させる 2つの風景

2004年の9月、私は友人の陶芸家の個展が開かれるアラスカのフェアバンクスに出かけました。アンカレッジ経由で夕刻の空港に着いたとき、傾いた太陽が、ほんやりとした薄明かりの中に、なんだかきな臭く、異様な感じで見えていました。それが山火事のためであり、毎年起きると知ったのは後日のことです。滞在中ずっと、フェアバンクスはオーロラどころか、星影さえ見えないほど煙っていました。そんな旅の帰路立ち寄ったアンカレッジで、私は、過去の大きな出来事を思い出させられる風景に出会いました。現在のアラスカは緑が多いのですが、かつては氷河に覆われていた大地。アンカレッジの町も、その名残である深い湾の奥に位置しています。アンカレッジから隣のターナゲン湾の奥に氷河見学に行く途中で、私は樹木が立ち枯れている景色を見ました。また、温暖化でだんだん小さくなっていく氷河を見た後には、郊外の丘に、地震メモリアルパークがあるのに気づきました。この2つとの出会いから、私が思い出したのはアラスカ大地震。その記録を、すぐにでも調べたい衝動にかられました。